

郷土の発展のために―

明暦3年以来、代々庄屋を務めた旧家である井谷家。明治23年に5村が合併して誕生した日吉村の初代村長となった人物が、この住宅の施主である井谷正命氏です。

村長就任後、「道づくり・町づくり・人づくり」に尽力した正命氏。私立日吉実業学校の設立、宇和島・須崎間や長浜・日吉間の県道開設など、下鍵山地区の町並み整備に力を注ぎました。実業学校では自らが教師を務め、町並み整備にあたっては自己所有の田を無償で開放するなど、私財をなげうってでも地域発展に尽力した正命氏。正命氏の遺歌である「我こそは貧しくなるも 吾が郷の 栄え行くこそ 楽しかりける」からも、地域の発展に懸ける正命氏の高い志がうかがえます。

また、大正時代には日吉村誌を編纂し、武左衛門一揆研究の第一人者として、一揆の意義や志を継承していききました。

そして、その正命氏の長男として生まれた井谷正吉氏もまた、郷土の発展のために生

涯を捧げました。

当時、三重県七保村で農事技術員として勤務していた正吉氏は、農村問題の研究から日本農民組合の結成等に尽力。大正11年、日吉に帰省した正吉氏は、仲間とともに「明星ヶ丘我等の村」をつくり、同年の5月1日には、四国で初めてとなるメーデーを行いました。そして、農民・労働者運動、部落開放運動、地方自治運動、文化活動等に励みました。

また、父・正命氏が大正8年に起興したものの、資金不足のために宇和島港に放置されたままだった「武左衛門翁及同志者碑」を、「民衆の村」の象徴とすべく、昭和2年、4日間かけて日吉へと運搬しました。

その後、国政にも参与した正吉氏。政界を引退後には、国および県から様々な表彰を受けました。

この井谷父子が生涯を捧げた「郷土のために―」という精神。この郷土を愛する精神は、今も日吉地区の人々の中に受け継がれています。

井谷家住宅の魅力

今回の文化財登録では、井谷家住宅のうち次の5カ所が、また同時に明星草庵も認定を受けました。

▼主屋

この時期の建物としては、間取りも外観も、農家住宅とも庄屋の家とも言えない井谷家住宅。正命氏の記した建築平面図によれば、玄関は「送迎の間」、主人の部屋は「荘重」、座敷は「客」「高尚」など、各部屋にはそれぞれ生活と住まい、機能を表す名前が付けられています。

このようなことから、この井谷家住宅は、正命氏の思想・哲学が反映され建てられた建物であると言えます。



▼蔵

主屋の西側に廊下を介して建っており、土蔵造の2階建てで、屋根は切妻造置屋根式の棧瓦葺。旧家の屋敷構えを構成する土蔵となっています。

▼石垣および土塀

主屋玄関正面に設けられた石段の東西にのびる石垣と塀。この土塀の特徴の1つが、通常の土塀より高さが低い(約80センチ)ということ。井谷正命氏の建築平面図において、部屋と土塀の間の庭に「開豁(かいかつ・広く開けるといふ意味)」と書かれていることから、主屋の主室内から見える眺望を確保するため、あえて土塀を低くしたと考えら

れています。主室からは下鍵山幸田の町並みが一望できます。



▼南面石垣

井谷家住宅の敷地正面に付設された石垣で、正面門より西側と東側に築かれています。乱積み、落積み工法によるもので、正面入り口は切石加工した御影石を使用し、そのほかは砂岩質の河原石が用いられています。

石垣のある景観が一般的であった日吉地区においても石垣の撤去・改修が進む中、この石垣は良好な状態で残されており、大変貴重とされています。